

“渡良瀬遊水地”の自然と治水、



田中正造翁

そして歴史の重み・・・



渡良瀬遊水地

かつて古河市兵衛が創業した足尾銅山の鉱毒事件にたいする谷中村の村民の反対運動そして田中正造の働きが日本の“公害”問題の原点といわれている。その谷中村が強制破壊され鉱毒溜めのために作られた渡良瀬遊水地の“今”を視察する機会を得ることが出来ました(2020年2月11日)。「渡良瀬遊水地を守る利根川流域市民協議会」の高松さん、猿山さん、川俣さん、嶋津さんから説明を受けての現地の視察。

渡良瀬遊水地の面積は33平方キロで鎌ヶ谷市の面積の1.7倍の広さ。最初は第一調節池の“越流堤”と“囲ギョウ堤”の場所へ。渡良瀬川の水が多くなってきた段階であふれる水が、川と遊水地との境にある“囲ギョウ堤”の途中に3mほど低く切り込んである“越流堤”から遊水地の中に入り込んでいくとのこと。この堤の外側にある遊水地を囲む“周囲堤”も見ることが出来ました。

渡良瀬遊水地の渡良瀬川・思川・巴波川から集まる水の洪水調節容量は1億7180万立方メートル。2019年の台風19号のときは1億6000万立方メートルの水を貯留することが出来(ほぼ満杯の状況)、利根川の洪水対策として大いに役立ったとの説明でした。

その遊水地の中にハートの形をした“谷中湖”がありましたが、これは当初“平地ダム”として丸い湖を作る予定でしたが「谷中村を遺跡で残すべき」との市民の声によりハートの形になったとのこと。ただ東京都の“水がめ”として作られたがあまりの水質の悪さ(カビ臭)で、その対策として冬場干あげ“として湖の中の水をすべて抜く作業が丁度行われていました。



湿地再生事業の場所

午後からは谷中村跡で“水塚”を見、第二調節池のほうに向かいました。

2005年に第二貯水池(500万立方メートルの貯留)の計画もあったが、貯水池としてのこれ以上の掘削は自然への負荷が大きすぎると自然環境団体から反対の声があがり中止となった。その後今は少し掘削して湿地の回復・再生の事業が展開されている。ヨシ原の自然も渡良瀬遊水地の乾燥化で大きく変わりつつある中、豊かな自然を守っていくために“湿地再生事業”が展開されることに。それを受けて2012年にはラムサール条約登録されたとのこと。

植物は1000種(絶滅危惧種59)、昆虫は約1700種(絶滅危惧種23)、252種の野鳥(絶滅危惧種44)と生物多様性の豊かな遊水地に湿地を再生していく動きそして足尾鉱毒事件以来の歴史の重さとセットの形で承認されたとのこと。

湿地再生事業の現場での掘削状況も視察。削った浅い沼の向こう岸に野田市で生まれたコウノトリがすみついて大空を悠々と飛んでいました。地元の人たちもチューヒヤコウノトリがすみヨシ原と湿地で豊かな自然環境の中で渡良瀬遊水地を守っていきたく、「歴史的に重いものを持っているこの地に湿地を再生していきたい」との言葉が胸に残りました。

『ハートランド城』のなかの説明文では“足尾銅山・鉱毒事件や鉱毒への人々(田中正造・荒畑寒村・谷中の村民)の闘いが日本の公害問題の原点である”といった視点が薄められてしまっているようでした。きちんと伝えていくべきなのは・・・

何でこんなに大きな遊水地があり、今これが利根川の洪水対策にもなり、しかも生物多様性の豊かな葎原・湿地としてあることの意味をかみ締めなければと思われました。

「民主主義と自治そして平和主義」ふじしろ政夫 047-445-9144

*活動報告ホームページに掲載「いい鎌ヶ谷ふじしろ政夫」でアクセスできます。